

○下位春吉「お嘶の仕方」
（東京神田同文館發行定價金一圓二十錢）
氏新著

近時お話に關する研究は次第に旺んになった。

之に關する有益なる著書も續々と現れた。その中でも下位春吉氏の新著「お嘶の仕方」は最も注意すべきもの、一つである。殊にその頗る實際的な點に於て、他に類書がないと言つてもいい、位である。又その甚だ獨創的な點に於ても、多くその比を見ないのである。著者の言ふ所に據れば、著者のお話に關する研究は最も包括的なものであつて、この著はその計畫（第一編、話し方についての研究。第二編、嘶そのもの、研究。第三編、嘶の會についての研究）のほんの初の一部に過ぎないと言ふことである、而かも話し方といふたゞ一つの方面に於ても、幾多の大切な問題がある。即ち著者は、第一章、音聲。第二章、言語。第三章、語法。第四章、嘶の組立。第五章、態度。第六章、練習及實演の順序に於て、是等の問題を最

も詳細に論じて居る。而已ならず附録として、著者自作のお伽嘶「ごんざ蟲」を添へ、上述の話し方の諸點を實例を以つて、細密に分解的に示してゐるのは實際的でもあり懇切周到でもある。

幼児教育者にとつて、お話の研究の必要なことは今更言ふまでもないが、從來の研究が多くお話そのもの、研究に止つて、話し方の詳しい研究に缺けて居るの憾みが尠くない、而かも近來の傾向は智識としてよりも、術としてのお話の研究が旺んであつて、又大いに進んで居るのである。従つて如何にして善き話し手となるかといふことは今日の教育者に取つて十分且つ組織的に學ばなければならぬ學問となつて居るわけである。此の時に當つてこの最も適切なる良書を得たことは斯道の爲め大いなる幸と言はざるを得ない。又目下遠く伊太利ナポリの東洋語學校教官として傍ら熱心にこの研究を續けて居らるゝ著者に向つて遙かにその勞を謝さなければならぬ。（倉橋生）